

③ 大多良文庫

有江則子

一 文庫の設立

国家公務員の合同宿舎として、昭和四十二年港南区日野地区に、大多良住宅が建設された。私が入居した四十七年頃もまだ小高い山と緑が残り、山の断片があらちちに顔を出し、ウグイスのさえずりや、野鳥が飛びかう光景が見受けられる開発中の環境に、一抹の寂しさを覚えたような記憶がある。

公共施設は無論、文化のかけらもない環境の当住宅に、横浜市立図書館(野毛)から、地域への還元の意味での、配本制度の確立ともなつて、文庫開設の強い要望と依頼があったとのこと。本に興味のある何人かの有志が、七〇〇冊の配本を受け、住民からの寄贈本と合わせて、昭和四十六年九月に大多良(おおたら)文庫を設立した。

二 現在までの変遷

文庫が設立されて、今年は一五年目に

なる。蔵書も一、八〇〇冊に増えた。貸し出し冊数も約一〇年前(図一)と、

現在(図一、二)とさほど差がないのは、住民の職業柄、転勤のための移動は毎年常であつても、子どもたちの人数は一定している為であろう。そして、時がたつにつれ、文庫の存在は、今や大多良のミニ図書館として、しっかりと根づき定着してきている。

この一〇余年の間に、国鉄根岸線が開通し、宅地造成は進み、公団住宅が建設され、小学校も開校されるといふ、めまぐるしい環境の変化と共に、人口が急激に増加した。おのずと大多良文庫を利用する他地域の子どもたちが多くなりつつあるのも現状である。

三 現在の活動

「さあ、今年度は何をしよう。」五人からなる運営委員の年度始めの一声である。あくまで、文庫の主な活動は図書貸し出しである。誰もが気軽に、親しみや

すく文庫に足が向く様に、「読み聞かせ」「人形劇」「映写会」「講演会」「未就園児お楽しみ会」と対象も意識的に幅広く行事を組み立てている。

毎週土曜日の二時から四時まで図書のお貸し出しを行い、図書当番を有志のお母さんたち三五人プラス運営委員五人計四〇人で、四人グループのローテーションを組み、貸し出し中に、紙芝居や、絵本などの「読み聞かせ」をする。本を借りて来たついでに聞く子、遊びの合間に聞きに来る子、とそれぞれではあるが、食い入る様な瞳はいつ見ても快いものである。そんな小さな子どもたちに、お母さんからも好評のある、「未就園児お楽しみ会」を秋に行っている。皆と一緒に遊んだり、歌ったりお弁当を食べたりする会である。ちよつぱり園児の気分になるのであるか、我々を「先生」などと呼ぶ。大型絵本、紙芝居、簡単な人形劇、リズム遊びと、盛りだくさんの楽しい二時間半である。

へ恒例の人形劇のプレゼントをする。劇団の名称は、「こうさぎ座」。かれこれ六年前前に、読み聞かせメンバーから発展し、手掛けた作品は、「三びきの子ぶた」「ぐりとぐら」「ピチコちゃんのかっこん」「うり子姫とあまのじやく」「てぶくろ」「みみ助みみ平」、そして影絵の「うりさぎましろのおはなし」、(劇団名はここからとった)で、軍手人形から棒使い人形、ウレタン人形とさまざまではあるが、それぞれの持ち味があり、雰囲気が変わって楽しめる。昨年のクリスマスには人形劇「みみ助みみ平」と影絵、そして導入や間(ま)にパネルシアターを入れて公演した。

楽しい人形劇をモットーに、製作や練習は二カ月前から取り組む。舞台の中から子どもたちの視線を感じ、観る側と演じる側が一体になった時は、最高の幸福感に浸る。この楽しさと喜びを子どもたちにもと、今年で二回目の、小学生による「子供人形劇」を計画し、一月から人形の製作に入っている。基本はカラー軍

一 文庫の設立

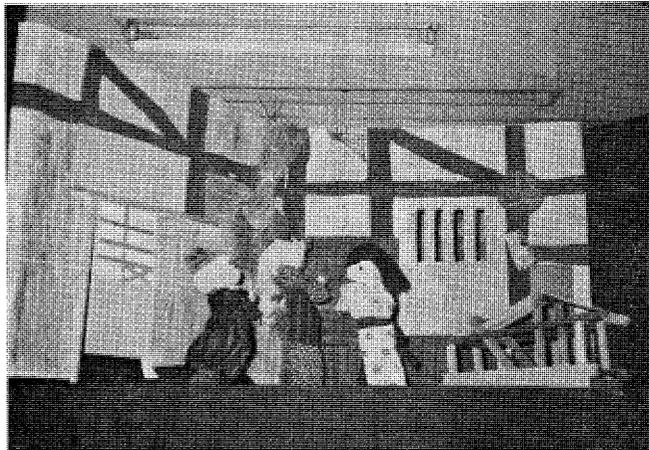
二 現在までの変遷

三 現在の活動

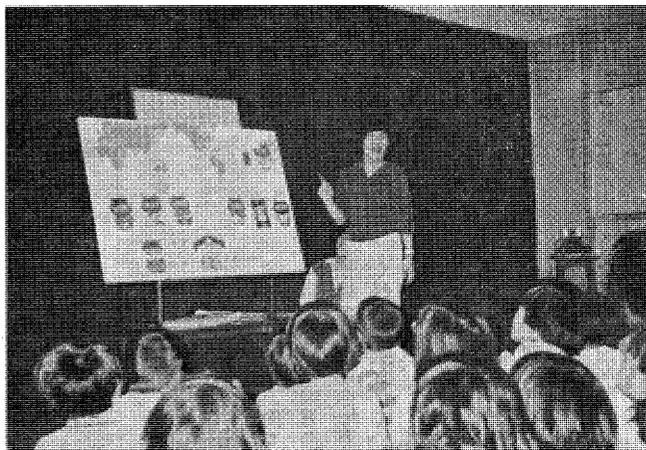
四 港南区「お話しキャラバン」

五 文庫の存在意義、そして文庫のこれから

写真一 人形劇「うり子姫とあまのじゃく」



写真二 パネルシアター「もしも世界にタヌキがいたら」



図一 昭和52年度利用冊数

	小人	大人	1日平均冊数	
			開館日数	小人 大人
52年3月	778	109	4	194 27
4	516	113	4	129 28
5	442	72	3	147 24
6	663	90	5	133 18
7	547	107	4	137 26
8	97	30	2	49 15
9	521	110	4	130 28
10	517	70	4	129 18
11	433	59	3	144 20
12	576	104	4	144 26
1	532	107	4	133 27
2	562	87	4	141 22
計	6,184	1,053	45	137 23

図二 昭和60年度利用冊数

	小人	大人	1日平均冊数	
			開館日数	小人 大人
60年4月	738	103	5	148 21
5	634	89	4	159 22
6	690	103	5	138 21
7	938	139	5	188 28
8	129	15	1	129 15
9	760	107	5	152 21
10	895	94	5	179 19
11	837	61	4	209 15
12	780	52	3	260 17
1	456	75	3	152 25
2	592	96	3	197 32
3	637	75	4	159 19
計	8,086	1,009	47	173 21

手を用いた人形で、小道具などもすべて子どもたちの手作りにする。初めて針を手にする子もいるが、どの子も真剣な面持ちで熱意がこもる。実に可愛い。一つの目的に力を合わせて作り上げていく過程に意義があるのではないだろうか。

夏休み最後の思い出として、「野外映画会」も恒例になっている。暗くなったの野外で見るスクリーンの映像には、何か特別な趣きでもあるのであろうか。子どもも大人も、かなりの人数が集まる。

文庫でただ一つ、大人を対象とした、子どもの本に関わる作家、画家の先生をお招きしての講演会をここ何年か開いている。子どもが本と出逢う重要な掛け橋となる母親に、少しでも何かをくみとってもらい、刺激になればと、そんな意識から、今年度は絵本画家であり作家でもある工藤直子先生をお招きした。一男の母親の立場としてのお話や、絵本にまつわるお話など、女性としても大変魅力的な、そして寛容な心とやさしさを持つ先生

生のお話に、それぞれの思いで何かを感じとったことと思う。

間もなく今年度の行事も、ほぼ終わろうとしている。運営していく上での資金は、当文庫は全面的に自治会からの補助金で賄っているが、運営方法、活動内容には一切関知されず、すべてを任せられている。よって文庫を運営する世話人も

自治会・町内会などの役員ではなく、有志からなり、発足当時と変わらない。この方法は、文庫と自治会組織の性格が異なるが故、理想的な様に思われる。

表一 港南区の文庫（港南区社会教育係調べ）

文庫名	設置年月	運営母体
上大岡第2文庫	昭和38・9	<自・町> <子>20人
あゆみ文庫	50・4	<父母>5～6人
旭化成子供文庫	41・4	<子>10人
最戸こども文庫	59・4	<子>10人
杉の子文庫	58・5	<文>20人
笹下台団地文庫	45・11	<自・町>50人
山ゆり文庫	56・5	<子>15人
あすなる文庫	48・1	<文>10人
港南台児童文庫	51・1	<子>20～30人
すぎな文庫	51・4	<父母>42人
日野団地文庫	46・4	<自・町>30人
やまゆり文庫	55・4	<父母>7～10人
藤ヶ沢文庫	50・3	<自・町>40人
野村港南台文庫	49・11	<文>120人
金井ファミリー文庫	48・9	<文>3人
大多良文庫	46・9	<文>80人
風の子文庫	54・7	<文>30人
ひかり文庫	51・1	<父母>70人
めじろ文庫	53・11	<自・町>110人
港南台文庫	55・4	<父母>
あかとんぼ文庫	52・10	<文>
のばQ文庫	56・4	<自・町>30人
ひとみ文庫	58・4	<子>10人
ひばり文庫	51・10	<子>44人
野庭文庫	50・7	<自・町>30人
みどりの文庫	54・7	<自・町>
第12文庫	54・10	<子>40人
庭の子文庫	55・11	<文>100人
あべりあ文庫	52・7	<自・町>60人
すずかけ文庫	52・3	<子>50人
むさし文庫	52・9	<自・町>95人
あおむし文庫	53・1	<文>50人
つくし文庫	57・3	<自・町>25人
月見ヶ丘文庫	50・4	<子>10人
上永谷文庫	39・4	<子>
ゆりがおか文庫	58・4	<自・町>50～60人
日限山文庫	53・3	<自・町>50人
三井団地文庫	49・4	<文>5～6人
三枝木台文庫	45	<子>10～15人
芹が谷ファミリー文庫	46・5	<主婦>20人
松の実文庫	52・11	<子>20人
安部文庫	41・4	<父母>40人
丸山台文庫	59・10	<文>50人
桜台文庫	60・4	<文>20人

(注) : <自・町>自治会・町内会, <子>子ども会
<父母>父母の会, <文>文庫有志グループ等
(資料) : 文庫活動についてのアンケート集約 (港南区)

四 港南区「お話しキャラバン」

一昨年、港南区制施行一五周年記念の行事の一環で、港南地区センターを一日開放しての「子供フェスティバル」が開かれた。模擬店や、手作りコーナー、そして、港南区内で常日頃活動しているお母さんたちの人形劇団「三三グループ」が、一斉に人形劇を発表した。これを皮切りに、毎年十一月に、「子供フェスティバル」を港南区市民課社会教育係主催で行うことになり、その一三グループの人形劇団を総合して「お話しキャラバン」と称している。

そもその発端は、神奈川県立図書館が委託していた財団法人「お話し子供キ

キャラバン」という素晴らしい人形劇団が、

カラフルなバスで地域を巡回し、子どもたちを楽しませてくれていたが、五年前にそのバスが廃止された。一年に一度やってくるキャラバンバスを楽しみに待っていた港南区の子どもたちにもう一度夢と楽しさをと、社会教育係の支援のもとに結成された。キャラバンバスにはほど遠いが、お母さんたちのバラエティに富んだ出し物を「子供フェスティバル」で披露している。

港南区社会教育係は、このような活動をしている文庫やグループ、そして子どもたちの文化面に、多大な協力と理解を示してくれている。そして、より良いものを子どもたちにと、この数年間、人形劇や

五 文庫の存在意義、そして

文庫のこれから

影絵、パネルシアターやペープサートなど、専門家を招いて講習会を設けて、我々に習得させてくれた。このようなバツクアップがあるため、活動が生き、幅ができたのは言うまでもない。そして一層の励みと、前進への糧にもなっている。

また、港南区には現在四四の文庫団体があり、そのアンケートを集約した資料を社会教育係で毎年明示してくれる事も文庫活動に大いに役立っている。私たちの大多良文庫、そして「子うさぎ座」も、これらの恩恵を受けながら活動している。

文化行政である市民の図書館が遠くて行けない子どもや、お年寄りのために、図書館の肩替わりをしているのが、地域の文庫ではないであろうか。活字離れしがちな今日の子どもの機会を与え、環境を作り、習慣をつけさせるには、身近に入りできる親しみやすい文庫の存在が必要では

ないだろうか。読書を単に、勉強と結びつけるのではなく、楽しみながら学ぶ、楽しい読書でなくてはならないと思う。本をとりまいて集まる子どもたちのふれ合いの中で、出合いが生まれ、仲間ができ、遊びが生まれてくるような、そんな楽しみの読書であって欲しい。子どもは地域で育るといふ考えから、総合的な意味で、地域の小さな文庫の役割も大きい。知識と教養を深めるための図書館も必要ではあるが、地域と密着した、特に将来をなう子どもたちのよりよい成長と幸福のためにも、文庫はなくてはならないもののように思う。

△大多良文庫運営委員▽